

旅行記というジャンル

スタンダール『ある旅行者の手記』をめぐって

杉本 圭子

ある作家が小説、演劇、旅行記など複数の文学ジャンルを手がけている場合、その作家の各々のジャンルに対する見解をさぐることは、作家の創作の本質にせまるうえで非常に重要な意味をもつと考えられる。同じ主題を扱うにも種々の文体があるように、作家は意識的、あるいは無意識的に、自らの題材に見合ったジャンルを選びとる。それは作家の筆にとってときに足かせとなり、ときにその可能性を広げもする。が、ここで注意しなければならないのは、文学ジャンルそのものが自明の概念ではないということである。ジャンル=マリ・シェーファーが指摘するように、ジャンルとは後世の理論家や批評家が便宜上採用した分類の体系を指すのみならず、あるテキストが出版当時から今日に至るまでいかなる範疇に属するものとして扱われてきたかという、その受容の経緯を物語るものでもあるのである¹。ジャンルという概念は基本的に相対的なものであり、時代により、またその語を使用する個人によりその実体を変える。たとえば今日われわれが「コント」(conte)の名のもとに分類するジャンルも、中世の『ばら物語』(*Roman de la Rose*)の中のアーサー王の挿話からペローの童話集(*Contes de ma mère l'Oye*)、フロベールの『三つの物語』(*Trois Contes*)まで、歴史的に見れば実に多様な形式のテキストに付されてきた名称なのである。こうした理解のもとに、われわれはつねにスタンダールの創作の時点に身をおき、小説、評伝、自伝、旅行記、美術・音楽・文芸批評といった各々のジャンルについての作家の見解をさぐることにした。なかでも比較的研究の遅れている旅行記に注目し、この作家にとってはたして「旅行記というジャンル」は存在したのか、したとすればそれはいかなるものか、そしてそれはいかにして形成されたのかを解明しようとするものである。本稿では1837年から1838年にかけて書かれたフランス旅行記、『ある旅行者の手記²』(*Mémoires d'un Touriste*)をとりあげ、同時代

¹ Jean-Marie Schaeffer, *Qu'est-ce qu'un genre littéraire ?*, Seuil, 1989, p. 65.

² テキストは次の版を使用した。本文中の引用はすべてこれに従う。*Voyages en France*, édition établie, présentée et annotée par Victor Del Litto, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1992. 以下、注では V. F.

の知的状況がテキストの記述にもたらした影響を中心に、作家のジャンル観の一端を考えることにしよう。

『ある旅行者の手記』は、商用でフランス国内を駆けめぐる鉄商人L***氏の旅日記という体裁をとって書かれている。旅の行程はスタンダールのそれ以前の旅行記の例にもれず、非常に気まぐれで偏ったものになっている。パリからニヴェルネ地方、ブルゴーニュ地方、さらにはリヨン、アヴィニオンまでいったん南下した主人公は、突如北上してロワール川を蒸気船で下る。ついでブルターニュを経てノルマンディーに達したかと思うと、再び南下して前回の穴を埋めるかのようにタラスコン、ニーム、オランジュを訪れる。作者の故郷であるグルノーブルに多くのページが割かれたあと、サヴォワ地方、スイスに立ち寄った鉄商人はいったんパリに戻る。めざすはまたもや南である。今度は南仏からマルセイユ、国境を越えてジェノヴァ、そして海路でマルセイユに戻り、その足で西へと向かい、モンペリエ、ペルピニャン、バルセロナにまで達する。フランス領に戻って、旅日記はボルドーで幕を閉じる³。こうしたとりとめのなさを、語り手は自らの取引上の都合にかこつけるのだが、ここに南仏びいきの作者スタンダールの好みが見られることは明らかである。

作品の構成も、それに応じて非常に無秩序である。旅行記とは筆者の旅先での印象をつれづれなるままに書きつけたものであるから、必然的にそうなると言ってしまえばそれまでだが、作者が出版を意図して書かれたものである以上、構成上の配慮を全く欠いていたとはいえない。街の印象、古代建築物や教会、美術館についての記述、行く先々で出会った人々との会話、地方独特の気質や政治制度、産業の現状についての考察などが、自由自在につづられている。飛躍や省略が多く、読者に行間を読むことを強いるような文体は、旅行記に限ったことではなくスタンダールのすべての作品に共通する特

と記す。また、邦訳は次のものを参照した。『ある旅行者の手記 I, II』、山辺雅彦訳、新評論、1983-1985。

³ 1838年の3月、スタンダールが『ある旅行者の手記』の続編の取材を兼ねた4ヶ月あまりの大旅行に出発するまでのあいだに書かれた原稿は、ここまでである。これに続く部分(プレイヤッド版で *Voyage dans le Midi de la France* と題された部分。邦訳のタイトルは『南仏旅日記』、山辺雅彦訳、新評論、1989)では鉄商人の手記という体裁はいちおう保たれているものの、むしろ作家自身の旅日記と呼ぶにふさわしく、日付や事実も実際のものに近い。取材メモとしての性格が強く、厳密な意味で出版を意図して書かれたものではないので、本稿では対象から外した。なお、ここまでの部分に関しても、出版を手がけたアンブロワーズ・デュボン社の意向により、サヴォワ地方以降のページ(プレイヤッド版は *Voyage en France* として区別するが、山辺氏の邦訳では『ある旅行者の手記』の中に一括して収められている)は生前出版されず、長いこと草稿のまま残されていた。

微なのだが、旅行記としての『ある旅行者の手記』が当時の読者に型破りな印象を与えたことは確かなようである。批評家の中には次に挙げるポール＝エミール・フォルグのように、不快感をあらわにするものもいた。

こうした類の「ざっくばらんな旅行記」[*voyages sans façon*]につきものものもひとつの欠点は、資料が雑然と並べられていることである。ド・スタンダールの著作ではこうした秩序の欠如の度合いがあまりに甚だしいため、計画的とも思われるほどである。職業柄、あるいはそうでなくても、ある本に書かれている筆者の考えを要約するのに非常にたけた人がいたら、この本から結論を、いや、せめて一貫した事実なり印象なりを引きだしてみてもらいたい。人種についての会話のあとに、美術館の分析が続く。その直後に現代史をめぐる一節がきて、そこに破廉恥な逸話がはめこまれるかと思うと、そこから女性一般に関する長広舌が導かれ、考古学上の議論で幕を閉じるといった具合だ。そういうわけで、個別にみると記述は明確、明瞭で、内容からいっても形式からいってもしばしば新鮮ですらあり、機知に富み、かつ要領をえた考察も交えられているのだが、全体としては何ページかすすむうちに頭が疲れてしまい、食餌療法による熱っぽいけだるさにも似た、麻痺状態に陥ってしまうのである⁴。

旅行記といったときに当時の批評家たちが具体的にどのような作品を思い浮かべていたのかをつきとめるのは難しいが、スタンダールの著作がその記述のとりとめのなさにおいてきわだっていたことは間違いない。その点を好意的に解釈してくれる同時代人もいないではなかったが、大方の反応は上のようなものであった。この特有のとりとめのなさをスタンダールのあらゆるテキストに共通の特徴として処理するか、あるいはそれこそがこの作品の新しさであり、独創性なのだ主張することもできようが、それではそこで議論が終わってしまう。むしろ『ある旅行者の手記』にみられる「人種についての会話」「美術館の分析」「現代史をめぐる一節」「逸話」「女性一般に関する長広舌」「考古学上の議論」といった雑多な要素の混在は、当時のフランスをめぐる他分野にわたるディスクールの氾濫を反映したものではなかったか。スタンダールはそこから有用と思われるものだけを選び出して利用し、あるいはそうした風潮に対抗して書くことによって、自らのフランス旅行記の独自性を誇示しようとしたのではあるまいか。本稿では、スタンダールの語りにおける、度重なる逸話の挿入と描写の回避というきわめて特徴

⁴ この書評は Old Nick のペンネームで 1838 年 7 月 8 日号の『商業新聞』紙 (*Journal du Commerce*) に掲載された (*V. F.*, p. 893 に再録)。

的なふたつの要素に注目して、『ある旅行者の手記』のテキストがいかに構築されているかを検証してみよう。

1 逸話の氾濫

語りにおける逸話の挿入は、スタンダールの手がけたすべてのジャンルを貫く特徴のひとつであり、一見したところ、テキストの無秩序をひきおこすひとつの要因であるように思われる。『恋愛論』(De l'Amour, 1822)や『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』(Rome, Naples et Florence, 1817, 1826)に散りばめられたさまざまな恋愛の逸話、『ロッシーニ伝』(Vie de Rossini, 1822)などの評伝、さらには『アンリ・ブリュラルの生涯』(Vie de Henry Brulard, 1835-1836)、『エゴチスムの回想』(Souvenirs d'égotisme, 1832)といった自伝に見られる人物の人となり語る逸話のほか、『赤と黒』(Le Rouge et le Noir, 1830)などの長篇小説においてさえも、語り手はともすれば本題からそれて興味深い事実を持ちだし、話に彩りをそえようとする。「物事の内幕や人間心理を明らかにしてくれるような歴史上の細部や興味深い小さな事実」と『プチ・ロベール』に定義されているように、逸話は原則として短い形式を採用するが、『ある旅行者の手記』にもりこまれた逸話は数行におさまるものから7ページにわたるものまで、非常に幅広い。わずかな数の言葉で人間心理の真実を細部にいたるまでの確に描き出し、しかも「おち」を備えていて最後まで読者を退屈させることのない逸話というのが、スタンダールの考える逸話の理想の型だったようであるが、サロンなどでの会話の中に組みこまれれば必ずやねらった効果がえられるはずのものでも、紙の上書きつけると思いのほか冗長になったりして、なかなか一筋縄ではいかぬものらしい。逸話という形式は実生活のうえでは話術のひとつの柱であると同時に、「ささいな真実」を重んじた作家スタンダールの創作美学と深く結びついていて、当人も折に触れてそれに磨きをかけようと努めていた形跡がみられる。つまりこの作家においては、逸話という言葉は取るに足らない枝葉的な要素、といった貶下的な意味では用いられておらず、それぞれのジャンルに応じた積極的な機能を担っているのである。先に挙げたポール＝エミール・フォルグの「破廉恥な逸話」(«une anecdote scandaleuse»)という指摘に対し、スタンダールが彼にあてた返答の中で特にこの部分をとりあげて反論したのも(「あなたの論じた著者[＝スタンダール]は、真実の逸話しか語っていません。(2つ3つの恋物語は別として)語られているすべての

事件の主人公と同じように考えていたのです。」)、無理からぬことなのである。

逸話の挿入の形式はさまざまである。話の流れに沿って語り手の口から直接語られることもあれば、語り手と友人たち、旅先で知り合った人々、旅の道連れ、宿での会食者たちとの会話にはさみこまれることもある。主人公が旅先で出会った人からその土地にまつわる逸話を聞くというのは、いわゆるピカレスク小説の中で伝統的に用いられてきた形式であるが、こうした入れ子状のスタイルが多いのが『ある旅行者の手記』の中の逸話の際だった特徴のひとつである。とりわけ、語り手がそれぞれの土地の主だったサロンに招じ入れられ、珍しい話を聞くといった演出形態は、会話術の一環としての逸話の挿入という、先に触れた側面を思い起こさせて興味深い。とかく単調になりがちな語りに精彩をそえるという効果をねらったとも考えられるが、会話という形式にかこつけて、滞在している土地と直接関係のない話題まで自由にとりこめるというメリットも大きかったのではないか。

もうひとつの特徴は、逸話がしばしば文脈を離れ、自律性を獲得するということである。この傾向はロマネスクな筋立ての恋物語において特に著しい。ここでは「リヨン 6月2日」の項に書かれたジレル夫人の物語を挙げておこう。この項はリヨン人の芸術に対する無理解、しかしそれを補ってあまりある料理のすばらしさについての語り手のコメントで始まり、ついでさる「食通の会」に招待され、その常連となった経緯が語られる。会食のあとはローヌ川の河岸を歩いてペタンクをしに行くのがならわしになっており、語り手もその散歩の最中にジレル夫人の逸話を耳にはさむことになる。以下、少々長い引用してみよう。

私たちは散歩をしながら、ジュネーヴへぬける門のそば、ローヌ川沿いにある小さな邸宅の前を通り過ぎた。「ああ、あれがお気の毒なジレル・ド・ロッシュ夫人のお宅ですよ。」と連れあいの紳士のひとりが言った。その会食者のほろりとした様子に気づいた私は、好奇心をかきたてられた。問いを発すると、次のような長い返事がかえってきた。

ロッシュ夫人は、若くて富裕な、美しく、愛想のよい未亡人であった。19のときに、恋愛の末結婚した夫を失った。25歳になり、6年来あらゆる求婚を拒んできていたのが、その年の秋をグルノーブルの近くにあるユリアージュの有名な城で過ごしにかけた。

⁵ 1838年7月付けフォルグ宛て書簡。Stendhal, *Correspondance III*, édition établie et annotée par Henri Martineau et Victor Del Litto, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1968, p. 263. 強調原文。

戻ってくると、夫人はラフォン通りの豪勢な住まいを出て、遠く離れた地区にあるこの小さな館に住むようになった。しかも、その全体を借り切ったのではなく、2階だけを借りたのである。1か月がたち、グルノーブル出身のある若者がリヨンで訴訟があるというので安い住まいを探していたが、美しい未亡人が2階に住む、その家の3階で我慢することにした。彼はしばしばグルノーブルに出かけた。あるとき、彼の言うところによれば2、3人の母親の召使いを連れて戻ってきたが、彼らときたら、ずいぶんときこちないふうだった。

この人たちは石工で、若者の家で3日すごすうちに、戸棚でかくすようにして便利な階段をこしらえた。これがあれば、誰にも気づかれずにジレル夫人のところへ降りてゆけるのだ。どうにも説明がつけないのだが、奇妙なことに、このドーフィネの若者が母親の3人の召使いのために乗り合い馬車を借り切って、ドーフィネまで送っていったのが目撃された。そして翌日にならないと帰ってこなかった。その訴訟とやらは長く続いた。それがすむと、若者はリヨンにとどまる口実を見つけだした。釣りを愛好するようになり、住まいの窓の下にあるローヌ川で釣りをよくしたものだ。

この関係が続いた最初の5年は、まったく感づかれずにすんだ。夫人はますます美しくなり、同時にずいぶん信仰深くなっていた。ついで、身体の不調を訴えて、家ですごすことが多くなった。青年は毎年1回、クリスマスの頃に、この美しい隣人に敬意を表しに行った。彼自身も、信仰深い人として通っていた。

ところが最後の年になって、この生活が続いて6年目に、世間はこのふたりの隣人のあいだには何かあると疑い始めた。家の中では、夫人がドーフィネ人の若者に頻りに手紙を書いていると噂した。若者はといえば、かつてはあんなにきちんとしていたのが、夜とんでもない時間にならないと戻ってこないのだ。秋が近づき、彼はいつものようにグルノーブルへと発った。しかし二度と帰ってこなかった。結婚したことがわかった。しかも、ある金持ちのユダヤ人の娘とである。あまりにこっけいな名なので、繰り返さないことにする。

夫人はヴァランスから職人を呼び寄せ、院内の大改築を行わせた。ずいぶん具合が悪そうだった。南仏への転地療養をすすめられ、蒸気船に乗り、ラ・シオタに腰を落ちつけた。しかし、この小さな街に着いて約1か月がたったころ、自室で窒息死しているところを発見された。パスポートを燃やし、下着のネームがはがしてあった。

司法により、ヴァランスの職人たちへの尋問が行われた。彼らが言うには、夫人に雇われたのは住まいの3階へ通ずる階段をこわすためであった。私たちはその家の前を通りかかったのである⁶。

この項はここで終わる。主要な出来事に関する記述(ここではグルノーブル

⁶ V. F., p. 114-115.

での夫人と青年の関係の発生などを省く一方、細部によって真相をほのめかす手法(夫人の死の現場の状況など)といい、登場人物の意図があとになるまで明かされない仕掛けといい、『恋愛論』や『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の中の情熱恋愛の典型としてあげられた数々の逸話と相通じるところがある。このように起承転結を備え、一篇の短編小説としても通用するようなまとまった内容をもつ逸話が『ある旅行者の手記』の中にはいくつも散りばめられている⁷。なお、上に掲げた例は情報源がはっきりしないが、当時の新聞記事などから想をえた逸話の場合、作者が原文に手を加えて人物に異なった役割を与えたり、性格を補強したりということが往々にしてみられる⁸。それが必ずしも逸話の本質に変更を加える性質のものではなく、自己目的化しているような印象を与えるにつけ、この種の逸話に作者スタンダールによる文体演習的な要素をみることも可能であろう。わずかな言葉でいかに効果的に人間心理の本質を語りつくすか。逸話は作家にとって、そうした技術に磨きをかけるための絶好の場だったかもしれないのである。

一方、『ある旅行者の手記』の生前発行された部分(ドーフィネ地方まで)においては、ひとつの項目がひとつの地名と日付に対応している場合が多いのだが(「ヌヴェール 4月14日」「オータン 4月29日」など)、地名がときに地方名で代用されていることがある(「ニヴェルネ地方 4月19日」「ブルターニュ地方から 7月3日」など)。このような箇所では往々にして、その土地にからむ、あるいは直接それとは関係のない複数の比較的長い逸話が何の脈絡もなく並べられている。たとえば「トゥーレーヌ地方から 6月23日」という項目では、粗野きわまる男に名誉を傷つけられた美しい未

⁷ ルネと泥棒の話(p. 89-92)、サン=シェリ夫人の悲運(p. 209-211)、ナントレ夫人の物語(p. 268-275)、妻をとりかえたドイツ人夫妻の逸話(p. 354-357)など。

⁸ 例えば「ブルゴーニュ地方から 4月26日」に挿入された姦通事件(p. 30-34)は、1837年6月12日と13日の『法廷新聞』(*Gazette des tribunaux*)に掲載された裁判記録を下敷きとしている。作者はどこどころ話を省略、要約したり、原文にはない事実を付け加えたりしながら、夫(フランソワ・ガンティエ)が妻の愛人(木靴職人マランドン)によって重傷を負わせられた経緯を忠実に追っている。追いつめられた恋人たちの手紙のやりとりなども、ほぼそのままに再録されており、特に目をひく変更点といえば、もはやこれまでと覚悟をきめ、死を選ぶことになるマランドンに、スタンダールの好んだ人物の型のひとつである内なるエネルギーを秘めた下層階級の青年特有の風貌が与えられていること(「マランドンはその土地では好かれており、農民にしては珍しく、すばらしく、風変わりな表情をもつ黒い目をしていた(p. 31)。」)、「風変わりな(esingulier)」はスタンダールの小説世界においては高貴な魂の持ち主にのみ付与される形容詞である)、そして物語の途中で、これもまたスタンダールの常套手段である作者の介入(マランドンが愛人にあてた手紙の中で、愛人の財産問題についてふれている部分があり、これが物語の妙味を損なうというコメントがさしはさまれている)が行われているということくらいであろうか。なじみのある読者には、こうした味付けによって物語がよりスタンダール的になっていることが感じられるはずである。

亡人、サン＝シェリ夫人の不幸の顛末につづき、地方政治の腐敗ぶりを物語る談合入札のエピソード、選挙制度の悪弊にまつわる挿話が語られる。ロワール川を下る蒸気船のアクシデントの記述をはさんで、場面は語り手と同乗客との会話に移るが、船中での話題は恋愛がらみで無実の罪をさせられたソーミュールの若い将校の災難、ナポリの反乱、ナポリ在住のロシア大公妃オストロレンカ夫人の奔放な言動(1837年9月30日付の『プレス(La Presse)』紙掲載の投書をアレンジ)というように、次々とどぶ。それぞれに気の利いた語り口がなされており、読む者を飽きさせないのだが、こうした項目の設定は先ほど触れた会話シーンの導入とあいまって、語り手が前後の文脈に頓着せず、雑多な話題を次々と盛りこむための格好の口実になっているように思われる。

スタンダールは本書の執筆のために、あらゆる友人たちからフランス各地の都市についての情報を募った。逸話に関しても同様である。「恋愛がらみの自殺、あるいは犯罪についての話があと3つか4つほしい⁹。」と友人に懇願する彼の書簡が残されている。興味深い逸話を耳にするたびに執筆中の旅行記にもりこもうとしていたわけで、自著の出版後になされた加筆訂正のあとを調べていくと(「プリモリ本」と呼ばれる特製白紙挿入本)、さらに複数の逸話を付け加えようという意図のあったことが見てとれるのである。しかし、作者は書く喜びにまかせて手あたり次第に逸話を増殖させていったわけではなく、ましてやそれを単なる埋め草と見なしていたわけでもなくて、挿入に際してはそれなりの戦略的な意図がはたらいていたと推察されるのである。以下、この点について考えてみよう。

『ある旅行者の手記』の中で逸話としてとりあげられている題材は多岐にわたる。先に挙げた恋愛に関するもののほか、ファルス的な滑稽譚¹⁰、歴史上の事件や著名な人物にまつわる逸話¹¹、事実の例証として機能する逸話、風刺的な逸話¹²などがある。ところで読者にフランス各地の風俗を知らしめ、

⁹ 1837年10月13日付けルイ・シャルドリュ・ド・レナル宛て書簡を参照のこと(*Correspondance III*, p. 246-247)。

¹⁰ 実父の急死に動転し、その亡骸を操作して自分に有利な偽遺言を作成しようとしたニヴェルネの婦人の逸話(p. 22-26)、よりごのみをしすぎて結局金目当ての結婚に失敗したブルゴーニュの若者の話(p. 36)、奪取られ亭主の逸話(p. 164-166)、グルノーブル地方の怪談(p. 382-383)など。

¹¹ ナポレオンの帰還に際してのグルノーブルの人々の熱狂ぶり(p. 400)、チフス患者の移送を手伝って自らも病に倒れた元コート・ドール県知事リオフ氏のエピソード(p. 62)、『コンスティテュシオネル』(*Le Constitutionnel*)紙からの抜粋からなるレスカール副司教アタナーズ・オージェと司教との友情をめぐる逸話(p. 182-185)など。

¹² 牛や馬に祝福をあたえて大儲けするブルターニュの田舎司祭の話(p. 309)、地方行政における談

それについての自らの見解を記すに際し、作者がより優れた説得の手段として逸話を積極的に活用していたふしがある。この時期、スタンダールが友人レナル氏にあてて書いた手紙の一節に戻ろう。

お願いです、逸話をいくつか教えて下さい。[...]この重要な本のためには、ささいで全く取るに足らぬようなことなど何ともありません。単純な事柄は、タバコをふかしてばかりいるような近頃の若者にはややこしすぎる体の理屈の部分のを和らげてくれるのですから¹⁸。

最後の一文に注目しよう。同時代の読者、とくに若者層の知力の低下に鑑みるに、具体的なもの、個別的なものから出発して普遍・一般に至るという特性をもつ逸話は、説得の手段として非常に有効なのである。いささか苦々しさをおぼえながらも、読者の嗜好の変化にあわせて語りにも工夫をこらさなければ同時代人の支持はえられないことを、スタンダールは十分に理解していたのである。

例を挙げよう。「ロリアン 1837年7月7日」の項で扱われているイヴ・ペネックの事件は、当時ブルターニュ地方の農民のあいだに根強く残っていたとされる魔術信仰の例証として引かれている。これも『法廷新聞』1837年2月2日の記事からの抜粋で、窃盗の罪で訴えられた18歳の若者ペネックの裁判でのやりとりを、作者はほぼ忠実に再録している。ルベール夫妻の家から大金が盗まれ、その直前まで作男として働いていたペネックに嫌疑がかけられる。被告はその後急に羽振りがよくなり、賭けをしては大金をすつているところを村人たちに目撃されている。

答(ペネック):「そのとおりです。楽しいから賭けが好きなんですし、たまには勝つこともあります。負けることのほうが多いですが、たいした額じゃありません。それに、私には金のあてがあります。[...]」

問:「しかし、金のあてとは何のことだね。」

答(ペネック):「(ペネックは一瞬考えこんだあと、深い誠意を見せるそぶり)で宝を見つけたんです。もう3年前のことです。ある晩、眠っていると、突如、枕元で声がしました。『ペネックよ、起きなさい。』私はこわくなり、毛布の下に隠れました。再び呼ばれましたが、私は答えずにおきました。翌日、また眠っていると、その声がまた聞こえてきて、怖がらなくてもよいと言うのです。『あなたは誰ですか。悪魔か、ケルデヴォットのマリアさまか、サン=タンヌ

合入札の実体(p. 211-215)など。

¹⁸ *Correspondance III*, p. 247. 注9も参照のこと。

のマリアさまか、はたまた死者の国からやってきた親類か友人の声かなにかではないですか。』と、私は尋ねました。その声は優しく答えます。『私はおまえに宝のありかを教えにやってきたのですよ。』けれども私は怖くて、ベッドにじっとしていました。その翌日、またその声が聞こえます。『ベネック、ベネック、起きなさい。怖がらないで。おまえの主人のグルムランの納屋の近くへお行きなさい。その壁際の平たい石の下に、幸福が見つかりますよ。』起きあがると、その声が私を導いてくれ、350 フランが見つかったというわけです。」

傍聴席は必死で耳をすましているため、静まり返っている。大部分の人がベネックの話を信じているのは明らかだ¹⁴。

証人喚問の末、ベネックは結局無罪放免となるが、実はこの最後の一文には重大な変化が加えられている。『法廷新聞』には傍聴席の反応は全く逆であったと記されているのである(「この話は、一部田舎の住人もまじった傍聴席の面々には全く信じてもらえなかったようだ¹⁵」)。なぜスタンダールは事実を歪めたのだろうか。おそらく、この話をブルターニュ地方の農民の迷信深さを示す逸話に仕立てるためであろう。記事を尊重することよりも、読者を説得することを優先したわけである。地方特有の風俗の例証として挙げられた逸話はほかにもいくつかあるが¹⁶、上の例は本文中に典拠(『法廷新聞』)が示されており、自らの主張の信憑性を増そうとする作者の意図がより明らかであるという点でも注目に値する。

主張の補強という目的以外に、逸話は「避雷針」の機能も果たす。とりわけ、政治や宗教がらみの話題に関してはそうである。時代は七月王政期。ルイ・フィリップに批判的で、正統王朝派、共和派、イエズス会士たちの暗躍も快く思っていなかったスタンダールにとって、うかつに口を開くことは外交官の職(チヴィタ・ヴェッキア在駐フランス領事)を失うことを意味した。『ある旅行者の手記』の中にも、不用意な発言を控える旨の断り書きが多くみられる。その点、直接的な攻撃を避け、実例を引くという形で世情を婉曲的に揶揄することを可能にする逸話は絶好の手段であった。フランス旅行記という性質上、いきおい批判は一般にはあまり知られていない地方の行政組織や聖職者たちの腐敗の実態に向けられる。「トゥーレーヌ地方から 6月

¹⁴ V. F., p. 302.

¹⁵ この『法廷新聞』の記事は、スタンダールの文章との異同を示すという形で一部ブレイヤッド版の注に再録されている(p. 1133-1134)。

¹⁶ 「ヴィエンヌ 6月10日」の項には、南仏人特有のエネルギーを示すものとして、同市でおこったふたつの姦通事件が挙げられている(p. 142)。

23 日」の中の談合入札の実態を描いた逸話においては、作者は慎重のうえにも慎重を重ね、舞台をフランスから外国へと移している。

政府が発注する大型工事の入札に伴う収益については、皆の語るところである。しかし、この件に関して実状を知る者はわずかだ。政府を支持するかしらないかによって、盗みの事実を信じるか信じないかが決まる。私個人としては、国王の政府の実に誠実な支持者であるつもりだが、同時に無数の盗みが行われていることも心から信じるものである。私が遺憾に思うのはお金のことでなくて、詐欺の習慣なのだ。

フランスで起こっていることについては語りたくないの、最近隣国で起こったことを話題にしようと思う¹⁷。

道路の改造のための工事入札にからむ不正を、廉直な主任技師とその片腕の青年技師、「清貧に甘んじることのない」知事代行の事務局長と土木局長という二つの陣営の確執を通して描きつつ、作者自身は「このような話なら 20 はあるが、退屈になってもいけないし、馬鹿者には私が羨んでいると思われるおそれがあるので、記さないことにする。読者には、住んでいる県の庁舎で何が起きているのかということ、少し真剣に考えてみて頂きたい。それから陪審員のようにして、はたしてさきほどの話は事態を悲観的に描いているかどうかという質問に答えて頂きたい¹⁸。」と結び、行政改革の具体的な方策を提案するにとどめている。しかし面と向かって攻撃の矢を放つよりも、こうした間接的なあてこすりのほうがより大きな起爆力をもつというのは、往々にしてあることである。このように風刺の手段として逸話を活用する方法は、スタンダールがジャーナリストとして文学・音楽・絵画にとどまらず、社会全般に関して批評活動を行っていた時期(1820 年代)に習得した論法のひとつであるというミシェル・アルスの指摘には、興味深いものがある¹⁹。

ファルスの逸話が読者を楽しませようとする意図のもとに挿入されたとするなら、こうして例証や風刺のために用いられた逸話は言葉の最も古い意味において「レトリックな」機能を担っていることになる。しかしそうした内的な必然性に裏打ちされたものではあっても、旅行記というジャンルを

¹⁷ V. F., p. 211.

¹⁸ V. F., p. 215.

¹⁹ Michel Arrous, 《De l'anecdote à l'histoire : Stendhal journaliste》 dans *Stendhal et la presse, textes réunis par Philippe Berthier*, Grenoble, 1986, p. 14.

考えたとき、そこにこれほど多くの逸話を、ときには文脈を無視してまでもりこむ理由はなにかという疑問は依然として残る。スタンダールが旅行記というジャンルに関して何らかのコンセプトをもっていたとすれば、逸話の度重なる挿入もその要請に従ったものと考えすることはできないだろうか。この問いに答えるためには、『ある旅行者の手記』における逸話とその他の部分との関わりをみていく必要があるが、次の節では、やはりテキストの中で大きなスペースを占めている描写部分に対する作家の特徴的な姿勢を検証することにしよう。

2 描くか、写すか —— 描写の問題

旅行記の作者にとって、場所の表象は避けて通ることのできない要素である。それがいかなる目的をもった旅の記録であれ(巡礼、修業、商用、視察、観光、取材など)、移動によって旅人はたえず新しい刺激を受け、その新鮮な感覚と一種独特な居心地の悪さを楽しみながら、見聞きしたことや思うところを紙に書きつけるのである。こうしたジャンルにおいて問題になるのは、語りの部分(道中の様子や旅先での交友の記録、考察、逸話、歴史や地理に関する説明的な文章など)と描写の部分(風景や建造物、風俗の描写など)との兼ね合いである。もちろんこのふたつを明確に区別することは難しいし、旅の目的や書き手個人の関心のもちかた、旅行記の形式(日記、取材メモ、書簡体、報告書、回想記、旅行ガイドなど)や執筆の意図、出版の媒体によっても、その配分のしかたは大いに異なってくる。一般にはあまり知られていない土地の紹介ということであれば、地勢や町並み、風俗の描写には多くのページが割かれるだろうし、ある土地に触発されての作家の想像力の自由な飛翔がつづられたテキストにおいては、逆に具体的な描写は少なくなるであろう。

さらに言えば、クリスチヌ・モンタルベッティが指摘するように²⁰、旅行記とは本質的に間テキスト性を属性とするジャンルである。方法論的な事柄に全く無頓着なアマチュアの手になるテキストは別として、作家や文筆家の書く旅行記の記述は無数の引用や参照から成り立っている。例えば19世紀前半の作家にとって、永遠の都ローマは歌枕のなかの最たるものであり、ゲーテをはじめ数々の先人たちの文章をふまえずにすませることはできな

²⁰ Christine Montalbetti, *Le voyage, le monde et la bibliothèque*, PUF, 1997.

かったし、シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅』(Itinéraire de Paris à Jérusalem, 1811)はそれ以降の東方旅行のバイブルとなったのみならず、旅行記というジャンルの雛形ともなったのであった。

『ある旅行者の手記』における描写の問題もまた、間テクスト性をぬきにしては考えられない。しかも、典拠となっている資料がその当時勃興しつつあった考古学の分野の著作や旅行ガイドからとられているだけに、必然的に同時代的視野が要求される。ここでは、1830年代におけるフランスの特殊な知的状況が『ある旅行者の手記』のエクリチュール、ひいてはスタンダールの旅行記をめぐるジャンル観にもたらした影響を探ってみたい。

手始めに、本書の執筆の経緯を簡単に追っておこう。『ある旅行者の手記』はスタンダールにとって『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』(1817年度版と1826年度版)、『1818年のイタリア』(L'Italie en 1818、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』1817年度版の続編として書かれたもの、死後出版)、『ローマ散歩』(Promenades dans Rome、1829)につぐ5つ目の旅行記であり、このジャンルにおける到達点といえる。前3作は著者(「騎兵将校ド・スタンダール氏」)による旅日記、『ローマ散歩』はイタリアを訪れた7人の観光客と3人の召使いのグループの代表者(同名)のつけた日記という体裁をとっているが、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』1817年度版が実際の旅行に一部対応しているのを除けば、いずれもフィクションの要素が大半を占める。『ある旅行者の手記』に関してもその点はかわらない。ただし執筆に先立ち(そして奇妙にも執筆直後にも)、スタンダールが取材旅行らしきものを企てたという点が異なっている。

アンブロワズ・デュボン社がスタンダールに執筆を依頼したのか、それとも『ローマ散歩』の売れ行きに味をしめたスタンダールが、今度はフランスものでひと儲けしようとして同社に企画をもちこんだのかは定かでないが、とにかく1837年5月、史跡調査官として視察旅行に赴こうとしていた友人メリメに同行して、作家はパリから南へ向かう。ニヴェルネ地方をかすめてペリー地方、プルターニュ、ノルマンディーに至る2ヶ月あまりの旅であった。したがって、『ある旅行者の手記』に書かれたそれ以外の地域に関する記述は、以前訪れた際の記憶をもとになされているか、知人や書物から間接的に得た情報ということになる。

事実、スタンダールは各地の名所旧跡について書く際、訪れなかった土地に関してはもちろん、自ら足を運んだ土地に関しても、メリメの考古学的著作や、その先達であるオーバン＝ルイ・ミラン(1759-1818)という考古学者の

著作、さらに旅行ガイドの類を徹底的に利用し、しばしば剽窃したのである。デル・リットーの編集によるプレイヤッド版の出版によって、情報源はかなりの部分までつきとめられ、作家の創作過程が明らかになった。ひとつ前の旅行記、『ローマ散歩』についても、スタンダールが18世紀から19世紀前半にかけての歴史書、美術書、旅行記、さらには雑誌などを参照したことがわかっている。

スタンダールはかつて評伝『ハイドンの生涯』(Vie de Haydn, 1814)や『イタリア絵画史』(Histoire de la peinture en Italie, 1817)の執筆の際にそうしたように、単に便がよいという理由だけで剽窃に及んだのであろうか。街の歴史、地勢、美術館の収蔵品等の情報に関しては明らかにそうであろうが、少なくとも風景や建造物の描写部分に関しては、その背景を考えてみる必要がありそうである。そもそもその類の描写に対するこの作家の嫌悪感には根の深いものがあり、小説や自伝においてのみならず、『ある旅行者の手記』の中にも描写を拒否する旨の断り書きがしばしば見られる。この性向は、真に感動的なものは言葉で表現することはできないというペシニズムとあいまって、必要とあらば他人の著作から都合のよい部分をとってきて事足りりとする態度に結びつく。例として、「ブルジュ 1837年6月20日」の項の、サン・テティエンヌ教会についての記述を見てみよう。ここで語り手は闇に閉ざされ、ランプの光にのみ照らされた教会の内部に足を踏み入れたとたん、異様な感動を覚える。

この教会のようすを伝えることは全くできそうにない。私にはけっして忘れ得ぬ教会なのだが。塔はひとつしかなく、トランプカードの形をしていて、か細くて極端に縦長の円柱の束からなる4列の巨大な支柱によって、5つの身廊に分けられている。845年に建設が始められたというのに、ゴシック様式だ。私がたたえてやまぬ北側と南側のふたつの立派な扉は、それより前の時期に属するものと思われる。南側の木製の戸に注目しよう。大文字のRに覆いつくされている。

私が明確に言えるのは以上の点に限られる。ゴシック教会の100にのぼる主な部分の名称を示した小さな事典でも一般に出回らないうちは、言葉だけで私の見たものを理解してもらうのは全くもって不可能だ。図版が不可欠である。[...]

人にわかってもらえるような描写をすることはここでは私にはできないので、建立の経緯について述べてよしとしよう。オペラや絵画の批評を担当する、優雅だが中身の無い文士たちが連日そうしているように。

サン・テティエンヌというのがこのカテドラルの名であり、フランスで最も美しい部類に入る。845年、シャルルマーニュのおかげで諸芸術が繁栄しはじ

めんとする頃に建立が始まった。完成は数世紀も後のことである。12 段の階段を昇ると教会の正面の扉に着くが、その幅は 169 ピエである。主扉の上の浮き彫りは「最後の審判」を表している。16 世紀の宗教戦争の間に、プロテスタントたちが正面の聖人達の顔のほとんどを破壊してしまった。

主身廊の高さは頂上の要石までで 114 ピエで、幅は 38 ピエ、建物全体の長さは 148 ピエである。円柱の高さの平均は 52 ピエで、12 世紀につくられた、鮮やかな色彩のステンドグラスのはめられた薔薇窓は直径 27 ピエを下らない²¹。

一段落目の「トランプカードの形」という独特の比喩を含む教会の形容はスタンダール自身の手になるものだが(スタンダールは執筆前にメリメとともに同地を訪れており、この教会を実際に見た可能性が大きい)、最後のふたつの段落は『旅行者のためのピトレスクなフランス案内書²²』(1834-1838)というガイドの記述をもとにしている。細かい数値は、すべてここからきている。建築の与える感動を読者に伝えるためには描写が不可欠だということは理解しており、だからこそ見たままを自分の言葉で描き出してみようとするのだが、またもやそうした企ての虚しさを思い知らされるという結果になる。そして自分の言葉による描写をいったん放棄したからには、読者には最低限、建物の形状さえわかってもらえればよいわけで、その点では図版がいちばん手っ取り早いのだが、それがなければいささか無機的ではあるが、借り物の記述で十分というわけである。

描写忌避の背後には、言葉に対するペシミズムのほかに、ルソーやシャトーブリアン風の豊饒で華麗な文体に対する生来の反感があることはいうまでもない。とくに後者がスタンダールの文学観に与えた決定的な影響については、多くの研究がなされてきた。『ある旅行者の手記』冒頭にも次のような一節がある。「田舎の人は、自分の住む地方が美しいということになっていると、シャトーブリアン氏の誇張された文体を下手にまねた大げさで内容空疎な言葉で、なんでも同じようにほめそやす²³。」しかし、この前後を読んでみると、標的となっているのはシャトーブリアンその人だけではないことがわかってくる。「[パリとは逆に、田舎では]美しい場所とか、まさに中世を思わせる廃墟のそばを通りかかったとして、なにか珍しいものが見られ

²¹ V. F., p. 191-192.

²² Société de gens de lettres, de géographes et d'artistes, *Guide pittoresque du voyageur en France*, Firmin Didot, 1834-1838, 6 vol.

²³ V. F., p. 4.

ると教えてくれる人は皆無である。」「[...]あなたの別荘の近くにうっとりするような景色がありますよと新聞記事に教えられていなければ、この近くになにか見るべきものはないかという問いに、その人[=田舎の人]はこう答えるだろう。『なあ旦那、この森の大木は年取がいつているから、[これを伐り倒して]10万リーヴルの年収をあげるのは軽いですな²⁴。』」つまり、地方の人がシャトーブリアン風の風景賛美にかぶれるのは、ひとえに新聞記事の影響によるのである。この時期、ロマン派の潮流を受け、フランス国内の風光明媚を追求する趣旨の新聞および雑誌の記事が氾濫していたことを思い起こさねばならない。ジョルジュ・サンドやアレクサンドル・デュマ、テオフィル・ゴーチエなど、大作家たちがこぞって『パリ評論』(Revue de Paris)、『プレス』、『両世界評論』(Revue des deux mondes)などに旅の印象記を連載していた。中には、読むに値しない記事も多くあったことだろう。はっきりと名指しているわけではないが、そうした論調の記事全般に対し次のような辛辣な皮肉を浴びせている。「もし一週間与えられれば、サン・フルール付近のカントル山脈で有効に費やせるだろう。そこには、ペトラルカのソネを読んで楽しむ魂の持ち主にふさわしい孤独がある。が、これ以上ははっきりと場所は示さないでおこう。雑誌に記事を書きまくる三文文士たちの、紋切り型の、最上級だらけのまずい文章にかかっては困るから²⁵。」

それでも彼は、自らの旅行記に描写を取り入れる必要性は認識していた。本を売るためには同時代人の要請に迎合し、ある程度旅行ガイド的な要素を入れなくてはならないことを理解していたのである。1830年代後半から1840年代前半にかけての時期は、ヨーロッパにおける近代的ツーリズムの勃興期とされる²⁶。産業革命の進展に伴うブルジョワ層の成長、鉄道の開設などが物理的な基盤を用意し、ロマン主義の波は人々の目をアルプス、ピレネーの崇高な風景やエキゾチックな東方世界へと向かわせた。旅行代理店の出現、ガイドブックの発行(英国の『マーレー(Murray)』、ドイツの『ベーデカー(Baedeker)』、フランスの『ジョアンヌ(Joanne)』シリーズなど)もこの時期にあたる。しかしスタンダールが『ある旅行者の手記』の取材旅行に出たころには、余暇に旅行を楽しむことのできるのは富裕な年金生活者や旧貴族に限られており、彼らとて乗合馬車や蒸気船を乗り継いでの困難な

²⁴ V. F., p. 3-4.

²⁵ V. F., p. 170.

²⁶ この点に関しては次の文献を参照のこと。Marc Boyer, *L'Invention du Tourisme*, Gallimard, «Découvertes Gallimard», 1996, p. 50-69.

旅を強いられていたのである。そして「フランス旅行記はほとんど存在しない。そういうわけで、この本を出版する勇気がわいたのだ²⁷。」と『ある旅行者の手記』の冒頭にあるように、前世紀以来、フランス人の関心はとかく国外へと向かい、フランス人の手によるフランス旅行記は「ほとんど存在しない」というのは言い過ぎだとしても、外国人(とくにイギリス人²⁸)の専売特許に近かったのは事実である。上で挙げたような新聞記事を別にすれば、我々が今日読むことのできる文筆家によるフランス旅行記は、私的な書簡・日記の形で残されたもの(例えばヴィクトル・ユーゴーの旅先からの書簡)がほとんどである。

そのかわりこの時期のフランスは、それ以外のさまざまな分野の言説の網の目からみとられていた。まず、旅人向けに書かれた前世紀以来の伝統的なガイドが挙げられる。のちの『ジョアンヌ』のような観光を主眼としたガイドとは異なり、ここには広く私用や公用でフランス国内を移動する人向けに、目的地までの経路と所要時間、宿駅間の連絡、土地の旅館やレストランのリストといった実用的な情報もりこまれている。そしてこの時期になると、それぞれの地域の地勢、代表的な都市の沿革や産業、おもな公共建築物や遺跡、さらにはおすすめの散歩道やパノラマといった項目がつけ加わるようになる。スタンダールが『ある旅行者の手記』執筆の折に参照したジャン＝ベルナル・リシャール著の『旅行者のための古典的ガイド、フランス・ベルギー・オランダ編(第15版)²⁹』(1832-1833)は、その代表格である。

次に、「ピトレスクな旅行記」(《voyage pittoresque》)と総称されるロマン主義時代特有のジャンルがある。1835年版のアカデミーの辞書によれば「風景、絵、版画入りの旅の記録」ということになり、シャルル・ノディエ、ジュスタン・テイラー、アルフォンス・ド・カイユー共著の『古きフランスをめぐるピトレスクでロマンチックな旅行³⁰』(1820-1878)が典型として

²⁷ V. F., p. 4.

²⁸ この分野における古典と見なされるアーサー・ヤングの『フランス紀行』(*Voyages en France pendant des années 1787, 1788, 1789 et 1790*, 仏訳は1793年刊)や、レイディ・モルガンの『1823年と1830年のフランス』(*La France en 1823 et 1830*, 仏訳は1830年刊)などが挙げられる。なお、この時期のフランス旅行記については、次の論文に概観が示されている。Victor Del Litto, «Le voyage en France avant les *Mémoires d'un Touriste*» dans *Retire "les Mémoires d'un Touriste", textes réunis par Philippe Berthier*, Grenoble, 1988, p. 5-10.

²⁹ Jean-Bernard Richard, *Guide classique du voyageur en France, en Belgique et en Hollande*, 15^e édition, 1832-1833, Audin, Paris.

³⁰ Charles Nodier, Isidor Sévrin Justin Taylor et Alexandre Achille Alphonse de Cailleux, *Voyages pittoresques et romantiques dans l'ancienne France*, Firmin Didot, 1820-1878, 21 vol.

挙げられる。ここでは自然の奇観(峡谷、滝など)、古代遺跡、中世の教会や城などに焦点があてられ、古代作家や史書からの引用を散りばめ、修飾語をふんだんに使った華麗な文章で、地方ごとの風光明媚な景色がたたえられている。大型本で、各章の前には陰影のきいた劇的なタッチの石版画が挿入されており、そこでは人間を寄せつけぬ厳しい自然の光景、廃墟となった城や荒れ果てたゴシック教会などが特に好まれる傾向にある。題名の示すとおり、著者の関心は「現在」にはない。ロマン主義的な審美眼に照らして美的価値をもたぬ要素は、すべて排除されているのである。当時一世を風靡した記念碑的な書物だけに、スタンダールがその存在を知っていた可能性は大きい。また『ある旅行者の手記』初版第2巻の末尾で、作家は生まれ故郷のグルノーブルやその周辺の地域について長々と論じているが、その際に役立てた『ドーフィネ・アルバム³¹』(1835-1839)というドーフィネ地方の名所を紹介した挿し絵入りの4巻本は、ピトレスクなものを追いき求める傾向といい、建築物の沿革に多くのページを割く傾向といい、ノディエらの著作と同様の趣旨で編集されているといつてよい。

ところで当時の旅行ガイドの中には、伝統的なガイドと「ピトレスクな旅行記」の両方の性質を兼ね備えたタイプのものであった。先にも触れた、スタンダールも参照した『旅行者のためのピトレスクなフランス案内書』がそれである。ひとつの県につき1冊の小冊子のかたちで配本が行われ、価格の面からみても入手はたやすかったと思われる³²。題名からも見当がつくように、ノディエの作品と同様、主な都市の俯瞰、崇高な自然や歴史的建造物などを描いた石版画がところどころに挿入されている。景観の描写にはやはりロマン主義的な語彙が多用されており、「ピトレスクな」(«pittoresque»)という語も頻出する。旅程などの実用的な情報のほか、各々の都市について、リシャールのガイドと同様に沿革や産業、公共建築物や遺跡、その都市の出身の著名人などが記してあるが、特徴的なのは教会や城、劇場や県庁などについて建築用語や数値を交えた綿密な描写がなされていることと、各都市の記述に先立つ県の概観が百科全書的な多数の項目(「地勢」「気候」「風俗・習慣」「衣装」「鉱脈」「農産物」「商業」など)から成り立っていること

³¹ Victor Cassien et la Société de gens de lettres, *Album du Dauphiné*, Grenoble, Prudhomme, 1835-1839, 4 t. en 2 vol.

³² 現に、スタンダールのチヴィッタ・ヴェッキア領事時代の蔵書の中にも、次の4冊が含まれているのが確認されている。N°39 «Gard», N°40 «Hérault», N°48 «Var», N°49 «Aisne» (*Catalogo del fondo stendhaliano Bucci*, sous la direction de Gian Franco Grechi, Milan, All'Insegna del Pesce d'Oro, 1980 による。).

である。実はこの二つの点は統計学と考古学という、当時発展めざましかったふたつの学問分野の言説がガイドの言説に流れこんだ結果とみてよい。

統治のために人口、土地利用、収支状況等のデータを詳細にわたって把握する必要性は、フランス革命以前から地方の領主たちによって認識されていたことではあり、第一執政時代のナポレオンも各県の知事に情報の収集を命じたが、国家の主導のもとに統計の編纂作業が全国規模で行われるようになったのは、七月王政下で「フランス総統計局」(S. G. F. = Statistique Générale de la France)が創設されてからである³³。国家の進むべき方向を決定するうえで、また革命後の国民意識の高まりに伴い、フランス人が自らの手で自らの国を数字を用いて定義する必要が生じたのである。1835年に出たアベル・ユーゴー(ヴィクトル・ユーゴーの兄)の手になる『ピトレスクなフランス³⁴』(1835)という3巻本は、こうした統計集と、先に挙げた「ピトレスクな旅行記」、さらには旅行ガイドの三つの性質をあわせもつ書物であった。すなわち、名所旧跡や都市の俯瞰のほか、ここには民族衣装を描いた図版、地元出身の名士たちの肖像画などがもりこまれている。アルファベット順に各県の紹介が行われ、それぞれについて20近い項目が設けられており(「アン(Ain)県」の例をみると「歴史」「古代遺跡」「気質・風俗・習慣」「衣装」「言語」「人名リスト」「地勢」「気候」「博物学」「景勝地」「街・町・城」「政治・行政区分」「人口」「国民軍」「租税・収入」「支出」「農業」「商業」「書誌」となっている)、主な都市の見どころについての記述がそこに続くといった体裁である。教会や中世の城、ルネサンス時代の館などの建築物の描写は、同時代の旅行ガイドの例にもれず専門用語や数値をふんだんに取り入れ、細緻を極めており、統計的記述が多いことを別にすれば、全体として『旅行者のためのピトレスクなフランス案内書』と非常に似通った百科全書的な性格をもっている。統計部分に関してA・ユーゴーが利用したのは、おもに執政政府から王政復古にかけて、各県の知事が編纂にあたった地域別の統計集であるが、スタンダールがこうしたおびただしい数のモノグラフィーの存在を知っていたのは確かである。

最後に、考古学の発展について触れておこう。史跡・文化財保護の動きが活発化したのはフランス革命以後である。革命による歴史的建造物の破壊の惨状が明らかになり、ナショナリズムの高揚に伴いフランスの「起源」を求

³³ この点については、次の論文を参照のこと。Hervé Le Bras, «La statistique générale de la France», dans *Les Lieux de mémoire*, sous la direction de Pierre Nora, Gallimard, 1997, t. 1, p. 1353 - 1382.

³⁴ Abel Hugo, *France pittoresque*, Delloye, 1835, 3 vol.

めようとする気運が高まる中、学士院、ついで碑文アカデミーが各地の文化財の点検にあたった。しかし多くの文化財は教会や旧貴族など、かつての支配者層の手に属していたことから、その保護は旧支配者層の復権につながりかねないという危惧もあって、なかなか衆人の理解を得られず、運動の推進には多くの困難を伴った。1830年、ギゾーが「史跡調査官」(inspecteur général des Monuments historiques)の官職を創設するに及び、メリメをはじめとする調査官たちが、保護を必要とすると思われるフランス各地の史跡を精力的に視察し、報告書にまとめることになる³⁵。こうして、スタンダールが『ある旅行者の手記』に着手したころには考古学はいまだ揺籃期にあり、用語も統一されていないという状態であったが、ロマン主義作家たちがこぞって中世建築を賛美したこともあって(ユーゴーの小説『ノートル・ダム・ド・パリ』がゴシック建築の用語の普及に大いに貢献したことは有名)、考古学は一種の流行となりつつあった。上でみたような考古学の専門用語を駆使した描写の氾濫は、このような状況を背景としているのである。

ところで、スタンダールはこの方面に関して全くの素人であった。ロマネスク、ゴシック様式のなんたるかを彼に説いて聞かせたのは、ほかならぬメリメである。そして作家はいささかの良心の呵責もなくこの友人の著作を利用し、必要に応じて剽窃、改竄したのである。彼が参照したのはメリメの3つの著作(『南仏紀行ノート(1835)』『西仏紀行ノート(1836)』『フランス中世教会建築(1837)』³⁶)のほか、その先達で「歴史的建造物」(«monument historique»)という用語の発案者であるオーバン＝ルイ・ミランの『南仏諸県旅行記³⁷』(1807-1811)である。メリメの二つの旅行記が、その地域の史跡や建造物についての純粋に学問的な報告書であったのに対し、ミランは建築よりも美術品や碑文に興味を寄せ、南仏の人々の風俗や暮らしぶりにも言及している。スタンダールが考古学という学問にどれほどの価値を認めていたかについては意見の分かれるところであるが、『ある旅行者の手記』の中には考古学者への痛烈な揶揄がしばしばみられるのは事実である。この点につ

³⁵ 文化財保護の歴史については、近年多くの文献が出版されているが、ここでは次の論文をあげておく。André Chastel, «La notion du patrimoine», dans *Les Lieux de mémoire*, sous la direction de Pierre Nora, t. 1, Gallimard, 1997, p. 1433-1469.

³⁶ 前二者については新版を参照した。Prosper Mérimée, *Notes d'un voyage dans le Midi de la France*, édition présentée par Pierre-Marie Auzas, Adam Biro, 1989; *Notes d'un voyage dans l'Ouest de la France*, édition présentée par Pierre-Marie Auzas, Adam Biro, 1989; «Essai sur l'architecture religieuse du Moyen Âge», dans *l'Annuaire historique pour l'année 1838*, Société de l'histoire de France, 1838, p. 283-327.

³⁷ Aubin-Louis Millin, *Voyage dans les départements du Midi de la France*, Imprimerie impériale, 1807-1811, 4 vol.

いてはあとで触れる。

スタンダールのテキストに戻ろう。描写に対する嫌悪感にもかかわらず、スタンダールがそれを外から借りてくる形とはいえ、取り入れざるをえなかったのは、こうしたフランスをめぐる種々の言説をふまえてのことであった。すなわち繰り返しになるが、ある程度まで旅行ガイド的な要素を導入しなければ同時代の読者の関心はひけないことを、彼は見抜いていたのである。1829年に書かれた『ローマ散歩』には、街全体がひとつの美術館ともいえる「永遠の都」についての記述ということもあって、『ある旅行者の手記』以上に名所案内の要素が多く盛りこまれており、おそらくそれゆえに、スタンダールの著作にしては例外的な売れゆきを示した。作品の設定自体も、召使いをひきつれた有閑階級の男女7人が、ローマで観光をしつつ生活を楽しむというものであった。先人たちの足跡に覆われたイタリアとは異なり、フランスにはいまだまとまった形での旅行記がないという状況に乗じて、彼が自著を売りこもうとしたことは想像にかたくない。それは題名からも知れる。『ある旅行者の手記』の語り手は物見高い鉄商人であり、同時に「旅行者」(«touriste»)でもあるが、この身分は、もし題名がスタンダールによって選ばれたのだとするなら(出版社が題名を指定した可能性もある)、デル・リットーの指摘するように、作品内での発言についての責任をかわすための「避雷針」にもなりえようが、より単純に考えれば、新語の使用によって世間の注意をひくためであったろう³⁸。

また出版社の側も、発売に先立つ新聞広告の中で、新しく刺激的な知見によってフランス人に自らの地方の文化遺産や自然について学びなおす機会を与えてくれる書として、『ある旅行者の手記』を紹介している³⁹。売りこみの際の目玉となっているのは、あまり知られていない地方の美術館の収蔵品の紹介、隠された名所案内、そして上で述べたような歴史的建造物の描写といった要素であり、しかもこれらが『赤と黒』『ローマ散歩』ですでに知られる作者独特の機知に富んだ文章によって味つけされているという点である。事実、スタンダールが『ある旅行者の手記』を手がけたころは、革命

³⁸ «touriste」の語の歴史に関しては、『ある旅行者の手記』ブレイヤッド版のデル・リットーによる序文の解説を参照のこと(p. XXXIII-XLI)。この語は1816年、ルイ・シモンという仏作家のイギリス旅行記に初めて登場し、その後イギリス関係の雑誌において繰り返し使用されるようになる。当初は主にイギリス人の旅行者について使われていた。スタンダールが題名に取り入れたことで、この語は一躍市民権を得るようになるが、「touriste」と«voyageur」との区別は概して曖昧であった。

³⁹ 発売予告のうち、おもなものはブレイヤッド版に付された資料によって読むことができる。V. F. p. 884-887.

後に各地につくられた教会や旧貴族からの没収財産、遠征による戦利品などを集めた美術館の体裁が整いつつある時期であったし、絵画通を自称していたスタンダールが友人の情報やカタログ類を駆使してナント、アヴィニョン、マルセイユ、リヨン、グルノーブルなどの美術館について論じたのも、目のつけどころがよかったというべきであろう。また、発売予告記事のひとつの目玉であるグランド・シャルトルーズ(アルプス山中にある11世紀に創立された大修道院)へのエクスカージョンは、本書においては例外的に、語り手が観光客の一団と行動をとるとするという『ローマ散歩』と似た設定になっており、スタンダールもおそらく足を運んではおらず、前述の『ドーフィネ・アルバム』から情報を得ていることから、明らかにガイドの要素の一貫として挿入されたと考えてよいだろう。各地のおすすめのパノラマの紹介に関しても同様である。

しかしこれらの要素、とくに建築物の沿革や様式についての記述が、いかにもとってつけたような形で挿入されているという感は否めない。個々の描写についてはもちろん、ゴシック建築の歴史についての数ページにもわたる講釈が二度も繰り返されている箇所などは⁴⁰、明らかにそのような印象を与える。そもそも語り手、そしてスタンダール自身の本来の関心は名所見物ではなく、むしろ旅先の風俗の観察にあるらしいのである⁴¹。従って語り手が「旅行者の義務」(«le devoir de voyageur», p. 41)を果たすためだけにオータンの大聖堂に登り、作者は作者で「ツーリスト」的行動に対する揶揄を書き連ねるのは、ひとえに妥協の結果ということになる。

この結果、いかなる態度が導かれるだろうか。一言でいえば、パロディによる差異化ということになる。同時代の嗜好に迎合しているように見えて、実はしていないことを示すための、それが唯一の方法なのである。

サインは至るところに見つかる。たとえば南仏のガール県にある有名なガ

⁴⁰ どちらもメリメ『フランス中世宗教建築』を下敷きとし、自己流にアレンジしたものである。V. F., p. 172-180, p. 472-480.

⁴¹ 「マルセイユ」の項で、語り手は通りをあてどなくさまよう喜びにふける。「パリから離れたときには、それが最良の時間の使い方」と彼は言い、次のように続ける。「ロンドンで、ロンドン塔の骨董品やウェストミンスター寺院の墓所を一日かけて訪れても、死ぬほど退屈し、何も得るところがない。こうした骨董品や墓の類は、どこでも同じようなものばかりだ。株式取引所からセント・ジェームズに至る歩道を一日ぶらぶらしていれば、イギリス人の社会的習慣、というよりは反社会的習慣についての興味深い事実がわかるのだ。/ だから、私が地方の美術館や、通俗的なゴシック教会や愚かな人たちが「名所」と呼ぶところのものを見に行くのは、意に反してのことである。私にとって興味深いのは、町中で起こることであり、地元の人はおそらく全く興味もたぬようなことなのである。」(V. F., p. 518.)スタンダール自身の日記からも、このような嗜好が早くから読みとれる。

ン・デュ・ガールについて、語り手は「魂は長い間、深い驚きにうたれる。」と述べたあと、例によって「深い感情が心を満たすが、それを誇張するなどもつてのほか、語ることもできない。」と続ける。そのあと数値をまじえた詳細な描写が始まるのだが、スタンダールがこの地に足を踏み入れた形跡はなく、『旅行者のためのピトレスクなフランス案内書』の受け売りであることがわかっている。ここに、次のような一文が見つかる。

私は崇高な建造物について、美辞麗句を連ねるつもりはない。それについては版画を見るべきだ。美しさを感じ取るためではなく、形を理解するためだ。形とはいえずいぶん簡素で、まさに有用性を目的として設計されている⁴²。

デル・リッターが注で指摘するように、この一文は前掲のガイドの次のような一節に触発されたものであろう。「このトスカーナ様式の3段のアーケードのなんという軽やかさ、なんという優雅さであろう。なんたる堅固さだろう。この橋脚の見事なことといったら！」⁴³ こうした美文調がスタンダールの反感を買ったことは間違いない。おまけに、スタンダールの参照した箇所の見開きには、決して出来がよいとはいえないが、ポン・デュ・ガールの全景を描いた小さな版画が挿入されている。この一点のみならず、『古きフランスをめぐるピトレスクでロマンチックな旅行』にみられたような、見る者を旅に誘うようなロマンチックな石版画が当時至るところに出回っていたことを考えると、「美しさを感じ取るためではなく、形を理解するため」というスタンダールの言葉は、そういった類の絵から美的価値を奪い取り、機能性のみを求めるといふ、いささか挑発的な行為と解釈できなくもない。

また、「ナント 6月26日」の冒頭には、次のような記述がある。「ナントの5つの施療院を見学せざるをえなかった。しかし幸いにして、この旅行記は統計や科学をめざして書かれたものではまったくないので、他の都市に関してと同様、読者にはそういった類の記述は免除してさしあげよう⁴⁴。」この箇所を読むにつけ、我々は市内の病院のベッド数まで詳細に数え上げているアベル・ユーゴの『ピトレスクなフランス』の「ナント」の項⁴⁵を思い浮かべずにはいられない。ここに、先に述べたようなフランスをめぐる百

⁴² *V. F.*, p. 365.

⁴³ *Société de gens de lettres, de géographes et d'artistes, Guide pittoresque du voyageur en France*, Firmin Didot, t. 2, «Gard», p. 17.

⁴⁴ *V. F.*, p. 238.

⁴⁵ Abel Hugo, *France pittoresque*, Delloye, t. 2, «Département de la Loire-Inférieure», p. 163.

科全書的な記述、とりわけ病的なまでの描写癖への揶揄を見ることはたやすい。

さらに、スタンダールが考古学、そして考古学者に対してしばしば批判的な目を向けていることは、さきにも触れた。実際、彼に言わせれば考古学者とはまず術学者であり、真実の探求よりも、他人の説を叩くことに楽しみを見いだす人々である。そして考古学とは「記憶の術」(«une science de mémoire», p. 345)に他ならず、博識ぶりをひけらかすために役立つのがせいぜいだ、等々。メリメの『フランス中世教会建築』を活用し、二度にわたりゴシック建築についての講釈を垂れる一方で、「正直に言えば、ゴシック建築とは私にとってハーモニカの音のようなもので、初めて聞くときには驚くべき効果をもたらすが、この楽器はつねに同じ音を出し、しかも月並みな曲になると耐え難いことになるという欠点をもつ⁴⁶。」と本音をもらす。教会の装飾の様式と年代を記した箇所では、読者はしばしば年代の暗記をすすめられる。のちのち知ったかぶりをするためだ。しかし作者自身は、歴史的建造物について「新語だらけの、誇張された文章を必死になって作り出す気にはなれない⁴⁷」と言う。

このように一家言ある作家が、専門用語を駆使した考古学的著作から長々と借用を行うとき、そこに何らかの意図をこめぬはずがないということは、容易に想像がつく。たとえば、リヨンの美術館に収められている古代の祭壇について、語り手は「読者が私ほど興味をもたれるか心配だ。」と前置きしつつ、こう続けている。

リヨンの祭壇は、この種のものとしては最も美しい碑であり、それで先ほど読者が読まれた部分を全部書き写す気になったのである。この祭壇には3つの面があり、正面は細ひもで飾られた雄牛の頭を表しており、これによって碑文がふたつの部分に分かたれている。第2の面には雄羊の頭蓋骨、第3の面にはペルセウスの剣のようなつくりの、「雄牛の生鬣を捧げるための」剣が彫られて

いる。

以下に、碑文の翻訳をのせる。お祈りの文句のようなものである。
「神々の偉大な母、イーデー、ディンデュメネー自身の命によって、神々の偉大な母のために行われた雄牛の生鬣の儀式に際し、祖国の父カエサル・チデュス・アエリウス・ハドリアヌス・アントニヌス・ピウス皇帝のご健康と、そ

⁴⁶ V. F., p. 150.

⁴⁷ V. F., p. 39.

およびキュベレ女神の祭司であるルキウス・アエミリウス・カルプスが、雄牛の精力を集めてヴァチカンに運び、自ら費用を負担して祭壇と雄牛の頭蓋骨とを聖別した。この儀式は 15 神官によって与えられた腕輪と冠を身につけた祭司クウィントス・サンミウス・セクンドゥスの采配のもとで行われた。祭司はリヨン市の聖なる命により、アッピウス・アンニウス・アティリウス・ブラドゥアおよびティトゥス・クロディウス・ウィビウス・ウォルス両執政官の支配下に、終身祭司職を授けられた。土地は市の勅令により与えられた⁴⁸。」

このあとにはさらに「祭壇の形をした二つの墓の碑文」の転写がつづくが、これらはほぼ文字通り、ミランの著作からの借用である。フランス語で読むと、これらの碑文の訳文はテキストの他の部分と明らかに性質を異にしており、聞き慣れぬ音の響きをもつ人名の連なりや、その単調で無味乾燥な文体によって、強い印象を与える。しかもそれが延々と続くことから、ここに作者のパロディックな意図を読みとることは大いに可能であろう。

こうしてこと描写に関しては、同時代の知を総動員し、時代の要請、あるいはジャンルの要請にこたえているように見せかけて、実際はそこにひとひねり加えることによって差異化をはかるといふ、スタンダールの手法が明らかになったわけである。しかし『ある旅行者の手記』の出版当時、一部を除き、大半の読者はこうした記述の情報源をつきとめることはできず、従ってスタンダールの誇る独自性を見抜くことはできなかったはずである。当時の読者がそうした側面を抜きにして、発売予告にあったように、単に有益な知識を与えてくれるフランス各地のガイドとして本書を受け取っていたのか、そしてスタンダールはそれを承知のうえで、あえて未来の「少数の幸福者」にあてて孤独にサインを送り続けたのか。これは『ある旅行者の手記』がいかなるジャンルの書物として受け入れられていたのかという問題とからみ、検討の余地のある問題である。

3 旅行記というジャンル

最初の問いに戻ろう。スタンダールにとって、はたして「旅行記というジャンル」は存在したのだろうか。

存在した、と我々は考える。少なくとも第 2 節でみたように、ある特定の要素を意識的に取り入れようとしたという意味においては、である。ただし

⁴⁸ V. F., p. 103-104. 人名は山辺氏の邦訳の表記に従った。

同時に、この作家が旅行記というものを、基本的には何を放りこんでもよい自由なジャンルだと考えていたことは確かである。主人公の鉄商人が旅先で突然オペラ評を繰り広げようが、愛読書である『ユリウス・カエサルの戦闘要項』(1836)について滔々と語り出そうが、たいした問題ではないのである。雑多な要素の混在、構成の一貫性の欠如は、実は旅行記に限ったことではなく、スタンダールの手がけたあらゆるジャンルに共通した特色なのだが、この点をあまり強調しすぎることは避けるべきであろう。何をもりこんでもよいとはいえ、作家が材料の選択および配置について、方法的な意識を全く欠いているということはまずありえないからである。

例えば、第1節で扱った逸話の挿入に話を戻せば、旅行ガイド的要素とのかわりで見えた場合、「彼 [=スタンダール] はすべてを見るつもりはなく、あるいは自分にとってつまらないと思われるものを描くのを拒むため、描写につまると一般論や逸話を持ち出すのが常套的な逃げ道ということになるだろう⁴⁹。」とジャン・プレヴォーが指摘するように、逸話は無味乾燥な描写部分に対する解毒剤ともいうべき役割を果たしているとも考えられる。具体例を挙げれば、「アヴィニョン 6月15日」の項で、アヴィニョンのおもな3つの教会について、メリメの著書から借用した沿革や建築様式についての記述でページをうめたあと、「しかし、読者はこのような細かい話に飽き飽きしておられるだろう。こうした建物を通りかかった際にごらんになれるようにと、名を挙げておいたのだ⁵⁰。」という文をはさんで、話はアヴィニョンのさる大尉の逸話に移る。これはコキュ(寝とられ亭主)をめぐるファルス的な逸話で、文章が単調に陥るのを避けるために挿入されたとみてまず間違いない。第2節でみたように、同時代の旅行記のエクリチュールはこうした逸話を排除して、名所案内的・歴史的・考古学的・百科全書的要素を重視する傾向にあった。一見脈絡なく放りこまれているように見える逸話も、描写の場合と同様、差別化の戦略の一貫として積極的にとりこまれた可能性がある。

一方で、同時代的視点を強調しすぎるあまり、通時的な視点を見失ってはなるまい。同時代の潮流に照らし合わせて、ある作品の革新的な側面ばかりが目立ったとしても、伝統的にみればある規範にのっとっているという可能性もあるからである。実際、フランス旅行記に話を限らなければ、スタンダ

⁴⁹ Jean Prévost, *La Création chez Stendhal*, nouvelle édition, Gallimard, «Folio essais», 1996, p. 431.

⁵⁰ *V. F.*, p. 164.

ールはイタリア旅行記を中心として、18世紀から19世紀にかけての多くの文人の旅行記を若い時分から読みこんでいた。とくにブロス書記長(Charles de Brosses, 1709-1777)のイタリア旅行記(*Lettres familières écrites d'Italie et 1739 et 1740*)、アーサー・ヤングのフランス旅行記などは、つねにそのジャンルのモデルとしてスタンダールの心に刻まれていた。従って、スタンダール以前の旅行記、とくに18世紀の旅行記において、逸話の導入が旅行記の常数のひとつだったとすれば、スタンダールはその伝統に忠実に従ったままで、心ならずも当時としては型破りなエクリチュールを産み出してしまったということになる。ある作家のジャンル観を扱う場合、共時的・通時的視点をつねに考え合わせねばならないのは、このような理由によるのである。

我々の今後の課題は、イタリア旅行記からフランス旅行記に至る時代の変化を頭に入れつつ、スタンダールの他の旅行記に対する批評から、旅行記というジャンルに対する彼の考えの変遷をたどることである。作家があるジャンルの内部において、伝統と革新、自由と束縛のはざまに立ち、いかに独自のエクリチュールを創造しようとしたか。この問いに答えを与えることが、最終的な目標となるであろう。